

「風葉和歌集」評釈

米田 明美

凡例

- 一、本論文は「風葉和歌集」の評釈を試みたものである。
(解説上、序文についての評釈は最後に行うため、巻一春上部から始め、順次行つて行きたい。)

- 二、「風葉和歌集」の本文は、宮内庁書陵部蔵を底本とする『物語和歌総覧』の本文を用いた。『物語和歌総覧』は京都大学国文学研究室蔵本で校合を行っているので、(異同)として掲げた。他に、丹鶴本代表として『新編国歌大観』を用い、桂切本(『物語二百番歌合風葉和歌集桂切』日本古典文学影印叢刊一四)とともに(異同)として掲げた。その他、大きな差異のあるも

のに限り『増訂校本風葉和歌集』を参考にした。

尚、各本文の引用をお許し下さった、樋口芳麻呂氏・藤井隆氏には心より厚く御礼申し上げます。

その他翻刻の方針は次の通りである。

- ・読みやすさを考慮して適宜漢字をあてたが、もとの仮名を振り仮名として右側に残した。
- ・適宜送り仮名を補い、右側に・を付して補ったものがあることを示した。
- ・他に歴史的仮名遣いでない仮名遣いの場合、歴史的仮名遣いに改めたが、その場合ももとの仮名を振り

仮名として右側に残した。

三、評釈は次の各欄より構成される。

《通釈》には、詞書と歌の通釈を記した。

《詞書語釈》は、詞書の語句を抜き出して解釈した。詠者についての解説もここに含む。また「物語二百番歌合」「源氏物語歌合」に同歌が採られている場合、ここにその詞書を示した。

《歌語釈》は、歌の語句を抜き出して解釈した。「物語二百番歌合」「源氏物語歌合」に同歌が採られている場合、また現存物語歌の場合で本文異同があるものは、ここに記した。

◎「物語二百番歌合」(日本古典文学影印叢刊一四)を用い、私に漢字・送り仮名・濁点を補った。

◎「源氏物語歌合」(甲本・乙本『物語和歌総覧』)を用い、私に漢字・送り仮名・濁点を補った。

《物語》には、各物語についての解説を掲げ、再出以後は初出を参照するようにした。

《詠歌場面》には、歌の詠じられた物語場面を記した。現存物語の場合、その歌の詠じられた状況について説

明を行い、一部引用した。散逸物語の場合、復原を試みられている各論文をもとに、その場面を参考として示した。

《鑑賞》には、「風葉和歌集」鑑賞という立場に立ち、その配列のおもしろさや、先行する勅撰和歌集の影響など記した。

◇引用文献(論文)は、著書に再録されたものについては、その本をあげた。

巻第一 春上部

巻第一は春上部である。勅撰和歌集の形式に則った「風葉和歌集」は、二十巻から成る勅撰集が通例春・秋部を下に分けているのをそのまま踏襲している。

「風葉和歌集」(以下、「風葉集」と略す。他の勅撰集も同)巻第一春上部には、五十九首の歌が収められている。これらの歌は、大体において季節の展開する順に配列されている。その配列を列挙してみると幾重にも重なってはいるが、おおよそ次のようになる。

立春(一〇四) 初鶯(二〇三) 霞(二〇七) まだふ
るとしのつらら(六) 子の日(七〇一〇) 若菜(一
一〇一六) 雪解(二七) 淡雪(二八) 霞(一九〇二
四) 鶯(二四〇三〇) 梅(二五〇四四) 春の月(四
五〇四九) 春の曙(五〇〇五二) 帰雁(五三〇五五)
春雨(五六) 青柳(五七〇五九)
「梅」が最も多い。先行する二一の勅撰集と比べて、「拾遺
集」に次ぐ割合(二〇首 一五割)で、そのため通例春上
部に存する「桜」の歌群が押し出され、春下部にだけま
まるということになったと思われる。

春立ちける日よませ給ひける

波のしめゆふの帝の御歌

一 たちかはる春のしるしに今日よりは初鶯よ声な惜し
み
そ

〔異同〕『増訂校本風葉和歌集』に依ると、狩野本(東北
帝大蔵狩野氏旧蔵本)は、「はるたつ日」「初鶯や」。

久曾神本(久曾神昇博士蔵本鷹司家旧蔵本)は、「立
帰る」。

〔通釈〕 立春になった日お詠みになられた歌

新しい春を迎えたしるしとして、初鶯よ、今日から
は声を惜しまず高らかに鳴け。

〔詞書語釈〕 ○春立ちける日―立春の日のこと。「古今集」

以来、巻頭歌に「立春」を置く勅撰集の型(「後拾遺
集」巻頭歌のみ立春に関わりない、元日詠である)を
踏襲している。

〔歌語釈〕 ○初鶯―その年初めて鳴く鶯、または初めて
聞く鶯の声。あらたまの年こえくらしつねもなきは
つ鶯のねにぞなかる(後撰集・哀傷・一四〇六・はるかみ
の朝臣のむすめ)

〔物語〕 「波のしめゆふ」―散逸物語。「風葉集」に八首

二・五〇〇・六九〇・七五三・七五四・一一四四・一二四一・二二
八三三。「花鳥余情」(野分の巻)に『なみのしめゆふ』
といふ物語に、よそへつつみれどかひなしかくての
みひとりはいかがあでの山吹ふりにたる事なれど、
かみの色ににたるこそおかしけれとて、山吹につけ
給。かたの少将にやなるらん」と、もう一首資料が
ある。「河海抄」の同項は、『浪のしめゆふ』と云物

語に、かたのの少将といふことあり。但、『源氏』以後物語歟。不審」とする。題号については、三角洋一氏『物語の変貌』(平成八年)が「賀茂保憲女集」(私家集大成)保憲女一の「風ふけばなみのしめゆふみだれあしのふしおきこひにしづむころかな」に依り「臥し起き恋にしづむ」物語の意かとされる。内容は、後に淑景舎女御となる女性は、兵部卿宮と関係があったが、宮が冷泉院女一宮と結婚することになり身を引いたらしい。帝と女御の間には一宮が誕生するが、女御は宮が忘れられない。宮の亡きあと、冷泉院女一宮は一周忌に出家する。題号からすると、宮との恋もかなわず、入内して皇子を生みつつ、宮を追慕する女御が「臥し起き恋にしづむ」主人公と考えられる。成立は、三角洋一氏『同』が、題号の著名な歌の一句にちなむ命名法や、「河海抄」「花鳥余情」の「交野の少将」の記述などとあわせ、「源氏物語」と相前後する頃か、ややおくれての成立かとされる。

〔詠歌場面〕 小木喬氏『散逸物語の研究 平安鎌倉時代編』昭和四十八年)は、「第一皇子の出生によって喜びのうちに迎えられた立春の日の御詠であろう」とするが、三角氏『同』は、「初鶯によそへて、なかなかうちとけ

ない女御の声が聞きたいという胸の内を詠んだものとも考えられる」とし、現存本「しのびね」の帝と典侍との関係に類似をもとめられ、参考歌として「源氏物語」(初音の巻)明石の姫君の「年月をまつにひかれてふる人はけふ鶯の初音聞かせよ」とされる。

〔鑑賞〕 勅撰集巻頭歌に倣って、立春の歌を据えている。「千載集」巻頭歌の詞書「春たちける日よみ侍りける」と同様であるが、「風葉集」の場合詠者が帝ということとで「よませたまひける」となる。物語場面について、第一皇子誕生という喜びのなかで詠まれた歌か、うちとけない典侍をうながすものか両説あるが、こゝは物語内容よりも「たちかはる春のしるし」の語より、勅撰集巻頭の立春を言祝ぐ意として置かれたのであろう。

冷泉院行幸ありて、御あそびも侍りける
ついでによませ給ひける

源氏の朱雀院の御歌

二 九重を霞へだつるすみかにも春とつけつる鶯の声

〔異同〕 京大本―「御あそびども」。物語・詠者名表記なし。丹鶴本―「御あそびども」「よませさせ」。

〔通釈〕 冷泉院の行幸があつて、舞や楽の宴がございましてその折にお詠みになられた歌

宮中から遠く霞を隔てたこの住まいにも春が来たと告げる鶯の声が聞こえます。

〔詞書語釈〕 ○冷泉院行幸―冷泉院(この「少女」の巻ではまだ帝。讓位は「若菜下」の巻)が院のお住まいになっている朱雀院に行幸なされた時のこと。○御あそび―当日、放島の賦(作文の試)や「春鶯囀」の舞、楽の演奏などが行われた。○朱雀院―桐壺帝と弘徽殿の女御の皇子。「桐壺」の巻で東宮、「賢木」の巻で即位、「潒標」の巻で讓位、「若菜上」の巻で出家。

◎「源氏物語歌合」五番 朱雀院(乙本「朱雀院御製」。詞書ほとんど同じ)

春鶯囀といふ舞まふほどに、昔の花の宴の日おぼしいでて、またさばかりのこゝろを見てんやなどの給ふに、鶯のさへずる声は昔にてと、おとど奏し

給へば

〔歌語釈〕 ○九重を霞へだつるすみか―霞がへだてるように宮中から遠く離れているこの院の御所(朱雀院) ○物語では、第四句「春とつけくる」。

〔物語〕 「源氏物語」―平安中期成立(寛弘五年には一部成立していたか)紫式部作。全五十四巻。「風葉集」に一八〇首。但し、その内四首(二〇八・八四九・一三九三・一三九四)は現存する「源氏物語」諸本には含まれておらず、散逸した「巢守」の巻中の歌かとする(堀部正二氏『中世日本文学の研究』昭和十八年)。「風葉集」に収められた歌数としては最多を占める。

〔詠歌場面〕 「少女」の巻。「きさらぎの二十日あまり、朱雀院に行幸あり。……」で始まる帝(後の冷泉院)の行幸の場面。「とくにひらけたる桜の色もいとおもしろければ、院にも御用意ことにつくろひみがかせ給ひ」と特に桜を愛でて行われた。舞人の舞う春鶯囀の舞を見て、かつて桐壺帝の御代、花の宴で源氏が東宮(後の朱雀院)の御所望でこの舞を一をれ舞ったのを思い出し、懐かしむ。「おとど」は源氏、「院の上」は朱雀院である。

◎物語本文(岩波新日本古典文学大系より) 以下「源氏物語」

の引用はこの本に拠る。

春鶯囀舞ふほどに、むかしの花宴のほどおほし出
でて、院のみかども、「又さばかりの事見てんや」
との給はするにつけて、その世の事あはれにおほ
しつゞけらる。舞ひはつるほどに、おとど、院に
御土器まいり給。

うぐいすのさえつる声はむかしにてむつれし花
のかげぞかはれる
院の上、
九重をかすみ隔つるすみかにも春とつけくる鶯
の声

・「源氏物語」校異(『源氏物語大成』による) 歌第五句
つけける―傳二条讃岐筆本、つけつる―園冬本、つけ―
葵生本(以上別本系)

〔鑑賞〕 物語では「二月二十日あまり」の暦日が記され、
立春を詠んだ歌ではないのだが、前歌と「春」「鶯」
「声」の語が共通し、声を惜しまず鳴けと待望された
鶯が、この歌で春が来たと告げているのである。

左のおほいまうちぎみ春日にまうでて、こ

れかれ歌よみ侍りけるに、「あしたの霞」と
いふことをよめる

うつほの右少将仲頼

三鶯の羽風をさむみ春日山霞の衣けさはたつとも

〔異同〕 丹鶴本―「けさはたつらむ」。

〔通釈〕 左大臣春日神社に参拝し、あれこれ歌を詠みま

したところ、「あしたの霞」という題で詠んで
いる歌

鶯の羽風が寒いので、今日春日山は、たなびく霞を
裁断し衣としてまとっていることよ。

〔詞書語釈〕 ○左のおほいまうちぎみ―左大臣、ここで

は源正頼のこと。但し、この「春日詣」の巻(一名
「梅の花笠」)では、すべて右大将と記され、正頼が左
大臣になるのは「国譲上」の巻。○春日―春日神社。
奈良県奈良市にあり、藤原氏の氏神を祭る。今の春
日大社。物語では、正頼は源氏であるが、母方が藤原
氏なので参拝したと記す。○あしたの霞―歌の題。物
語では、源仲頼が書いた和歌序にあわせて歌題が与

えられた。和歌序では「朝(あした)の霞緑の衣なり」の箇所。○右少将仲頼―正頼の部下、あて宮の求婚者の一人。この巻では右近少将。「あて宮」の巻で左近少将で出家する。

〔歌語釈〕 ○鶯の羽風―鶯が羽を動かした時に生じる風。

○さむみ―形容詞「寒し」の語幹に接尾辞「み」が接続。寒いので。○春日山―春日神社の後方にある山で、北に三笠山、南に高田山が続く。○霞の衣―霞を春の衣と見立てたもの。元来は詩の語句「霞衣」に基づく。春のさる霞の衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ(古今集巻二・三・在原行平) ○たつ―衣を「裁つ」と霞が「立つ」を掛ける。○物語では、第五句「けさはたつかも」。

〔物語〕 「うつほ物語」。平安前期成立(村上天皇の天徳(康保 九六〇年代に一部成立か)。「紫明抄」「原中最秘抄」によると源順とする。全二十巻。「風葉集」に一〇八首。但し、一一〇二・一一〇三は現存本「うつほ物語」諸本には含まれていないが、野口元大氏(現存うつほ物語諸本について『語文』第十二号 昭和二十九年八月)によると、元来「祭の使」の巻末にある贈答歌群中に存したかとする。「風葉集」に収められた歌数と

しては、「源氏物語」に次いで第二位を占める。

〔詠歌場面〕 「春日詣」(一名「梅の花笠」)の巻。「かくて、二月二十日になむ詣で給ひける」で始まる右大將源正頼一族の春日神社参拝において、その社頭で源仲頼の作った和歌序に従って三十八首の和歌が詠まれた。その中の一首。

◎物語本文(室城秀之氏著『うつほ物語全』より引用。以下「うつほ物語」はこの本による)

右近少将源仲頼 「朝の霞緑なり」
鶯の羽風を寒み春日山霞の衣今朝はたつかも

〔鑑賞〕 春になったとはいえ、まだ寒い様子を鶯の羽風によるあえかな寒さとし、それ故霞を裁って衣にし身に纏うという内容であり、立春の後「霞」「鶯」で前歌と共通性をもたせ、好位置といえよう。

この歌は、「続後撰集」(巻二・一七)に、「題しらずよみ人しらず」として収載されている。ただ「古今和歌六帖」(第二)にも「かすみ」でおさめられており、どちらも第三句が「かすがのの」と一致していることから、「続古今集」は、「古今和歌六帖」から採歌したと考えられる。中村忠行氏(物語歌の側面)「うつほ物語新攷」昭和四十一年、樋口芳麻呂氏(和歌と物語のは

さま―物語歌撰集の誕生』『文学・語学』昭和六十三年八月）参
考。たとえ勅撰集に収められていても、「風葉集」一仮
名序に「さてもうつほの『なすこそ神』といへる歌は
『拾遺集』に入り、住吉の『これを入相』の連歌は、小
一条院の御歌とかきこゆ。かかの類多かれど、いづ
れも物語や先ならむとて、漏るべきならねば、今こ
れを除かぬなるべし」と断っており、この歌もその
「類い」と考えられよう。だがこの歌は、春の配列の
三番目に位置しながら、前述の仮名序の例として引
用されなかつたのは、「風葉集」撰者（仮名序作者）
による撰歌ではない可能性も示唆できよう。

大納言忠頼なまよの七十賀を、むすめのし侍りけ
る屏風の歌えんぷのうた

よみ人知らず おちくぼ

四朝よむほらけかすみで見ゆる吉野山よしのやま春はるや夜のまに越こえてき
つらむむ

（異同） 京大本―物語・詠者名表記なし。

（通釈） 大納言忠頼の七十の賀の祝いを、娘が行いまし

た折の屏風に書かれた歌

ほのぼの明るくなつてくる早朝、霞がかかつて見え
る吉野山。その吉野山に春は夜のあいだに山を越え
やつて来たのであろうか。

（詞書語釈） ○大納言忠頼―落窪の女君（女主人公）の
父、源忠頼。この七十賀を発案し中心となつてお
言。物語では、この七十賀を發案し中心となつてお
こなつたのは、落窪の女君の夫大納言道頼である。こ
の後（巻四）で病を得、道頼（男主人公）より大納言
職を譲られ亡くなる。○七十賀―七十歳を迎えた長
寿を祝う祝宴。○むすめ―落窪の女君。○屏風―賀
算には屏風を新調し、祝宴に飾る習俗があつた。四
季、月次（つきなみ）屏風と呼ばれ、春夏秋冬或いは
一月から十二月までの行事・風景などが絵として描
かれ、その絵に合わせ詠まれたのが屏風歌である。屏
風そのものは現存していないが、屏風歌は数多く家
集や勅撰集に残されている。○よみ人知らず―和歌
の撰集などで、作者が不明のもの。または、事情が
あつて名を表すのを避けたもの。「風葉集」には二十

八首の「よみ人知らず」歌がある。ここは、屏風に書かれた歌なので、物語本文にも詠者名は記されていない。

〔歌語釈〕 ○朝ぼらけ―朝次第に明るくなってくるころ。

「あけぼの」よりやや明るいころを言う。朝ぼらけ有明けの月と見るまでに吉野の里にふれる白雪（古今集巻六・三三三・坂上これのり） ○吉野山―奈良県吉野郡、大峰山麓の山。○参考歌―さだぶんが家の歌

合せに 春立つといふばかりにやみ吉野の山もかすみてけさは見ゆらん（忠岑集） 御屏風に、春吉野山にかすみたり かすみたつ吉野の山を越えければふもとぞ春のとまりなりける（忠見集）

〔物語〕 「落窪物語」全四巻。「枕草子」に「交野の少将もどきたる落窪の少将などはをかし」とあることから、「枕草子」の成立以前に流布していたと考えられる。諸説あるが、およそ一条天皇の御代前後寛和と長徳（九八五く九九八）年間頃成立か。作者未詳。継母によって床のおちくぼんだ一室に入れられたために「落窪の君」とあだ名された姫君が男主人公によって救い出され、後幸福を得、継母への復讐が描かれた継子いじめの物語である。「風葉集」には、八首（四・

七二・一三九・四二一・五五三・五五四・七〇六・七五九）、そのうち六首がこの忠頼七十賀の折の歌（屏風歌五首、杖の歌一首）で、男主人公の歌はない。樋口芳麻呂氏（『風葉和歌集』の入選歌―『竹取物語』『落窪物語』を中心に―『鈴木弘道教授退官記念 国文学論集』昭和六十年） 参考。

〔詠歌場面〕 巻三。落窪の女君の父忠頼が、今年七十を

迎えるのを祝い、落窪の女君の夫大納言道頼が行った盛大な祝宴で披露された月次屏風の一月の絵に添えられていた歌。物語ではこの一月にだけ詞書が記されていないが、「風葉集」に収められている同じ月次屏風の歌の（七二・一三九・四二一・七五九）の詞書の書かれ方と比べ、「風葉集」が依存した本文にも一月の詞書は記されていなかったとみるべきか、歌集の冒頭四首目に位置するということで月次屏風の歌の説明を重視したためか。初春の山が霞んでいる画題が想像される。新古典文学大系や日本古典文学全集（小学館）の訳注では、元旦の朝の朝ぼらけとする。

◎物語本文（岩波「新日本古典文学大系」より）以下「落窪物語」の引用はこの本に拠る。

十一月十一日になんし給ける。こたみわが御殿

にみな引き出、迎へたてまつり給てなん。くはしくはうるさければ書かず。例の人のたゞいといかめしう猛なりけるなり。屏風の絵、ことどもいと多かれど、書かず。しるしばかりたゞはしのひら一ひら、

朝ぼらけ霞みて見ゆる吉野山春や夜の間に越えて来つらん

〔鑑賞〕 朝になると、吉野山が霞んで見え、一晚で春は山々を越えてやって来たのかと言う「立春」の感動をとして並べられた歌であろう。春・吉野山・霞は屏風歌によくとられた画題。前歌の「春日山」に対し「吉野山」とし、「霞」が重なっている。

題しらず

よみ人知らず まよふ琴の音

五うちきらしさえし雪げにたちかはりのどかにかすむ春の空かな

〔異同〕 丹鶴本―立ちかへり。

〔通釈〕 題しらず

一面に曇り冷え込んでいた雪空とはうつつて変わって、今日はのどかに霞んでみえる春の空であることよ。

〔詞書語釈〕 ○題しらず―その歌の詠じられた事情が伝

わらないこと、或いは詠歌事情が明らかであつても撰集にあたり何らかの事情で題を伏せられたため

「題しらず」とされた歌。「古今集」に詞書として最初に見え、勅撰集・私撰集などの歌集に踏襲された。

〔風葉集〕には七十五首前後の「題しらず」歌があり〔風葉集〕には末尾だけでなく大小数箇所脱落・錯簡が存するので七十五首前後とする）、そのうち「題しらず よみ人知らず」歌は、三首のみである（他は「有明けの別れ」歌―一三四・二みやまがくれ」歌―一四）。

〔歌語釈〕 ○うちきらし―「うち」は接頭語。霧や雪が

空一面曇らせる。うちきらし雪は降りつつしかすがにわぎへのそのに驚なくも（万葉集・卷八・二四五・大伴宿音麻呂）○さえし―「さゆ」に過去の助動詞「き」が接続。冷たくなった。冷え込んできた。○雪げ―雪が降りそうな空模様。雪空。炭がまに立つ煙さへ小

野山は雪げの雲に見ゆるなりけり（金葉集卷四・二九〇・皇后宮権大夫師時）

〔物語〕「浦風にまがふ琴のこゑ」―散逸物語。「風葉集」に十二首（五・五七・一一七・二四・二〇九・二二〇・二二二・二二三・三三二・三三三・三三三・三三五）。天喜三年（一〇五五）五月三日に行われた六条斎院祿子内親王物語合せに出された十八の物語歌の一つ「浦風にまがふ琴のこゑ」は、この「風葉集」に採られた「まよふ琴のね」と同一の物語という松尾聡氏の説（『平安時代物語の研究』昭和三十年）が有力。「よ」と「か」は字形が類似し、また「音」は「こゑ」「ね」と読まれ、「浦風に」が「夜の寝覚」を「ねざめ」と略することなど考えあわせると両者同一の可能性は強い。とすると、作者は武蔵で、祿子内親王家の女房と思われる。十二首中八首は和歌浦においての、東宮・先帝姫宮を中心とした遊樂の歌であり、歌の中に管弦遊びについての記載はないが、当然琴も奏されたであろうと考えられ、題名の由来もそれに拠るのであろう。内容は、松尾氏（『同』）が「遊樂だけを材として筋らしい筋をもたない随筆風な気分本位の小説であったかも知れない」とされ、小木喬氏（『同』）は、「筋よりも

遊樂行事の場面描写を主とした物語らしい」とされるが、樋口芳麻呂氏（『平安・鎌倉時代散逸物語の研究』昭和五十七年）は、光源氏の須磨・明石漂泊、並びに「うつほ物語」の吹上の巻の影響を指摘されている。粗筋は判然としないが、樋口氏は「まず春宮に和歌の浦下向を余儀なくさせるような事件が都に生じ（あるいは源氏と臘月夜の情事に似た恋愛か、反春宮派に乗じる口実を与えた事件であつたらう）、春宮は先帝姫宮が以前から移り住んでいた和歌の浦に身を寄せ、明媚な風光や、小人衆の気の置けない人々との遊宴に、傷心の日々をまぎらわせる。しかしその後、都に情勢の変化が生じ、父の今上が讓位し、古参の春宮が即位するに及んで、都に迎えられて春宮になり、先帝姫宮も和歌の浦を去る。一方、叶わぬ恋に懊悩する中納言があり、厭世的な日々をすごしているといった筋が考えられなくもない」とされる。また樋口氏は、和歌浦が流離の地に選ばれたのは、藤原頼通の永承三年（一〇四八）十月の、吹上の浜・和歌浦遊覽の史実によるかとされる。

（詠歌場面） 詞書・詠者名が「題しらず よみ人知らず」なので、詠歌事情がはつきりしない。「風葉集」で「よ

み人知らず」と記された場合、現存物語本文でも名の伝わらない女房・身分の低い女君であると思われる、ここも東宮か先帝姫宮の女房か、和歌浦に随行して来た者の歌か。歌内容について、特に悲壮感など感じられず、東宮が無事都にもどつてからの歌かとも考えられるが、なぜ「題しらず」となっているのか、不明。また物語合せて武蔵の提出した歌「春の日に磨く鏡のくもらねばいはで千歳の影をこそみめ」と何か関係あるか。

〔鑑賞〕 前歌と同様、昨日までの冬の景色が朝になり一変し、春を迎えた喜びを表していると思われる。